



TITLE:

<学会報告> ティリッヒとフロム

AUTHOR(S):

今井, 尚生

CITATION:

今井, 尚生. <学会報告> ティリッヒとフロム. ティリッヒ研究 2003, 7: 49-54

ISSUE DATE:

2003-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/57619>

RIGHT:

ティリッヒ研究 現代キリスト教思想研究会

第7号 2003年9月 49～53頁

学会報告

ティリッヒとフロム

自己愛をめぐる

今井 尚生

フロムの『正気の社会』が出版された1955年、ティリッヒはパストラル・サイコロジー誌にその書評を載せ、フロムの使用した「自己愛 (self-love)」という概念に対する問題提起をしている。これに対し、フロムは翌1956年に出版された『愛すること』において、自ら用いた「自己愛」という概念について弁明をしている。「自己愛」という概念を積極的に用いるフロムに対して、「自己愛」という概念の論理性に問題を見出すティリッヒ、ここでは「自己愛」という概念をめぐる彼らの議論を通して、両者の思想の根底にある相違点を明らかにしたい。

まず、フロムの「愛」という概念の規定から確認したい。フロムは「愛」を、人間の実存の問題に対する答えとして解釈する。フロムは、人間が動物の持つ本能的な適応性を失い、自然を超越した存在である、という人間理解から出発する。勿論、それでも人間が自然の一部であることに変わりはないが、もはや原初的な自然との一体性は失われ、自然から引き離されている。他の一切から切り離されているという分離、孤立の状態を克服することが人間の実存における最大の問題であるとフロムは認識する。「そこで、人間の最も深い欲求とは、分離 (separateness) を克服し、孤立

(aloneness) という牢獄を抜け出したいという欲求である」(フロム[1956],p.9)。この実存的問題に対して人類は色々の解答を試みてきたが、「完全な答えは、人間同士の結合 (interpersonal union)、他の人格との融合、即ち愛にある」(フロム[1956],p.18)という。このような人間理解に基づいて、フロムの「愛」は次のように規定される。即ち、「愛とは、自分自身の(他のものからの)分離 (separateness) と、自分自身の統合 (integrity) を保ったままの状態、自分以外の (outside oneself) 誰かなし何かと結び付くこと (union) である」。

ティリッヒは基本的にフロムの「愛」に関する洞察と、「愛」についてのフロムの規定を認めている。実際、フロムの思想との厳密な影響関係を指摘するのは困難ではあるが、ティリッヒ自身も「愛」を次のように規定する。「愛とは分離されたものを統一 (unity) へと駆り立てる衝動 (drive) である。」(ティリッヒ[1954],p.25) このティリッヒの「愛」の規定は、基本的にフロムのものと矛盾しない。しかしティリッヒはフロムの「愛」の規定を認めたうえで、彼が「自己愛」という概念を用いることに対しては反対しているのである。即ち、愛に対するフロムの規定に従って、愛が自己以外のものとの結合であるとするならば、何故に「自己に対する愛 (the love for oneself)」と言うことができるのか。「自己愛」というような曖昧な語を用いることはやめて、それがネガティブな意味であれば「利己主義 (selfishness)」、ポジティブな意味であれば「自己肯定 (self-affirmation)」ないしは「自己受容 (self-acceptance)」という用語に置き換えた方が良いのではないか。これがティリッヒの見解である。即ち、フロムの「愛」の規定に従えば、「自己愛」

という言葉には論理的な矛盾が含まれることになり、それゆえ概念としては成立しないということである。

この問題は「自己」が「愛」の対象になりうるか、という形に定式化することができる。愛とは、愛する主体と愛される客体との分離(separation)を前提としている以上、自己愛ということが成立するとすれば、自己の中にそのような分離が存在しなければならないことになるが、果たして自己意識の構造の中にそのような主体と客体との分離があるだろうか、というのがティリッヒの問題意識であり、それゆえ彼自身は「自己愛」という用語を使うことに大きな疑問をもっているのである。

自己が愛の対象になり得るかという問題に関して、フロムはその著『愛するということ』(1956)の中で述べている。フロムによれば、「自己愛」という用語は、愛は自分自身を含めたあらゆる対象に対して同じであるという事実を表現しているのだという。更にフロムは心理学上の前提として、「他者だけではなく、我々自身も我々の感情や態度の『対象』である」(フロム[1956],p.59)という点に注意を促している。

このフロムの議論の組み立てを整理すると次のようになる。フロムに従えば、先ず、愛とは特定の人間に対する関係ではなく、世界全体に対する人間の間を規定する「態度(attitude)」ないし「性格の方向性(orientation of character)」のことであり、それは人間の中にある「能動的な力(active power)」である。それ故、フロムの理解では、人間そのものに対する「態度」としての愛が、特定の人間に対する関係としての愛に先立つのである。通常は、人間そのものに対する愛は、特定の人間に対する愛の後に成立すべき抽象的なものと考えられる。「確かに遺伝学的には、人間に

対する愛というものは、特定の個人を愛することにおいて獲得されるのではあるが、人間に対する愛は特定の人間に対する愛の前提である(フロム[1956],p.59f.)として、人間というものに対する愛が、あらゆる個別の対象に対する愛の前提であるとフロムは主張する。そして、誰か特定の人を愛するということは、その特定の人を、本質的に人間的な質が受肉(incarnation)したものであるとして肯定(affirmation)することであり、そのような対象に対して、自らの愛する力を現実化し、集中することなのである。それ故、フロムが前提するように、もし自分自身が自らの態度の対象になり得るとすれば、自己という対象に対して愛する力を現実化することは成立するのである。というのは、私もまた一人の人間であり、「私自身をその中に含まないような人間」という概念は存在しないからである」(フロム[1956],p.58)。

これに対して、ティリッヒは次のように考える。自己とは、独立な中心(centre)であり、それ以上分離不可能(indivisible)なものであり、それ故、自己は「個人(individual)」と呼ばれる。それは、言葉の本来の意味で「分割不可能な(individual)もの」なのである。勿論、ティリッヒも主体であるところの自己と客体であるところの自己の間の分裂(split)は認める。自己意識が成立し、自己を反省的に捉えることができるというのは、そこに見つめる自己と見つめられる自己との分裂(split)が存在するからである。しかし、自己が分割不可能な個人(individual)である以上、自己の内部における分裂(split)とは、人格的存在相互の間に見られるような分離(separation)ではなく、それ故、分離を克服する衝動としての自己愛ということも、メタファーではあっても、概念としては成立しないというの

がティリッヒの見解である。確かに、自己意識における分裂は、本質的自己からの（実存的）自己のずれを認識可能なものとする構造ではあるが、そこにおいても自己が統一的中心を維持していることには変わりなく、それ故、自己と他者におけるような分離は認められないと考えるのである。このように見てくると、自己愛という概念に対する両者の見解の相違は、結局「自己」というものの捉え方の問題に帰着すると考えられる。

まず、フロムの考える自己愛の対象とは何か。先に確認したように、フロムの考える「愛」が「孤立」という人間の実存的な問題に対する答えである以上、自己を対象とする愛、即ち「自己愛」が果たして孤立の克服という問題の解決になるのだろうか。フロムの場合、自己愛の対象となる「自己」とは何か明らかにされねばならない。この点は、利己主義と自己愛の区別に関するフロムの議論から理解することができる。フロムは「利己主義と自己愛とは、同一のものであるどころか、実際には反対のものである」と主張する。「利己的な人間は……彼は自分自身のことを心に掛け過ぎているように見えるが、実際は自らの真の自己（real self）に心を配ることに失敗し、その失敗を隠したり、償ったりする無駄な試みを為しているに過ぎない」（フロム[1947],p.131）。フロムが、実際のところ利己主義は自分自身を愛しているのではない、と言うとき、それは自らの「真の自己」を愛しているのではないということを意味しているのである。逆に、フロムは「真の自己」に対する愛を「自己愛」と称しているのである。

それでは、「真の自己」とは何か。それは、「自己関心（self-interest）」という概念の変遷に関するフロムの議論から読み取ることが出来る。フロムは、自己関心は徳と同一である、というスピノ

ザ（1632 - 1677）の説を解釈しつつ議論を進めている。スピノザが自己関心は即ち徳であると言うことができたのは、そこで、自己関心が客観主義的に理解されていたからだという。一方で、自己関心が主観主義的に理解された場合、自己関心とは、「自己の関心であると人が感ずるもの」が真の自己関心だと理解される。例えば、人が自分の持ち物に関心があると感じていれば、持ち物に関する関心が自己関心と理解される。しかしこの場合、自己関心が徳と同一になる保証はない。他方で、自己関心が客観主義的に理解された場合、自己関心とは客観的に自己の「人間としての本性（nature of man）」に対する関心と考えられる。この場合の関心は、特定の個人に対する関心ではなく、人間の本性に対する関心であるため、それは自己に対する関心であると同時に、他者に対する関心でもあり得る。それ故、自己関心は利己主義ではなく、むしろ徳であると言い得るのである。フロムの理解では、スピノザにおいては客観主義的に考えられていた自己関心が、その後三百年を経て主観主義的に捉えられるように変化したが、自己関心が利己的に考えられるようになり、自己愛と利己主義が同義的に理解されるようになった原因である。この自己関心の意味の変化は、他方で自己の概念の変化に対応している。即ち、中世においては社会的宗教的共同体との関連において自己を考えていたのであるが、近世初頭以来、自らを一個の独立した存在と考えるようになり、一八・一九世紀には、自己の概念は更に狭まり、自己はその所有する財産と考えられるようになった（フロム[1947],p.135f.）。近代になり自己の概念が、その所有する財産にまで縮小したとすれば、確かに自己関心、自己愛は利己主義と同義になるのも当然のことである。

このように、フロムの「真の自己」とは「人間の本性」や「人間本来の可能性 (inherent potentiality)」のことであることが分る。人間が本来共同体において生きる可能性を有し、共同体との関連における自己が真の自己であるとするならば、他者との関係における自己を実現すべく心掛けることが、即ち真の自己に気遣い、育むという意味での自己愛に他ならず、それ故、自己愛は正に利己主義とは反対の事柄ということになるのである。共同体において他者との関係の中で生きる自己が真の自己であるとするならば、真の自己を実現すること（真の自己を愛すること）が、他者との分離を克服することに繋がるのである。そして、もしフロムの言う自己愛が人間というものに対する愛という態度の一つの表現であり、自己愛と他者に対する愛が矛盾するものでなく、むしろ関連しているとすれば、以上のフロムの議論が成立する要となる概念は、確かに彼の言うところの「真の自己」であると理解される。

一方ティリッヒが「自己愛」に替えて「自己肯定」という概念を提起する文脈において考えられているものは「現実的本性」のことであり、これは「真の本性 (true nature)」、「本質的存在 (essential being)」などとも言い換えられる。これはフロムの言う「真の自己」に対応するものであると理解される。表現はともかく、両者ともに「本質的自己」と称してよいものを念頭に置いていることになる。そしてその際のフロムとティリッヒの考え方の違いは次のところに存している。一方のフロムは、自己と本質的自己との間に、人格的存在相互の間に認められる分離 (separation) を認める。他方のティリッヒは、自己と本質的自己との間にあるのは分離ではなく分裂 (split) であるとみなす。ティリッヒの場合は、自己意識に

おける分裂は、本質的自己からの（実存的）自己のずれを認識可能なものとする構造ではあるが、そこにおいても自己が統一的中心を維持していることには変わりなく、それ故、自己と他者におけるような分離は認められないと考えるのである。したがって、「分離 (separation)」と「分裂 (split)」という概念に表れた両者の理解の仕方の違いは、結局、自己意識における主客構造を、自己と他者との主客構造と同様のものとみなすのか（フロムの分離説）類似的であるにせよ質的に違うものとみなすのか（ティリッヒの分裂説）という、「自己」理解の違いということに帰着するといえることができる。

今回、我々は、「自己愛」という概念に焦点を当てて、ティリッヒとフロムの考え方を比較検討してきたが、フロムとの思想連関を調べることにより明らかにされるティリッヒの思想の側面は決して少なくないのではないだろうか。同様の概念を用いながらも、その違いがどのように思想全体に関係してくるのかという問題は興味深い。後期のティリッヒの思想が、精神分析や心理学といった領域と重なる部分を多く持つこと、否これらの学問との折衝なしにはあり得ないことを考え合わせれば、彼が親交のあったフロムとの関連において、ティリッヒの思想を解明することの意義も認められ得るであろう。

文 献 表

- フロム (Fromm, Erich):
 1947: *Man for Himself*, Holt, Rinehart and Winston
 1950: *Psychoanalysis and Religion*, Yale University Press

ティリッヒとフロム

- 1955 : *The Sane Society*, Rinehart & Winston
- 1956 : *The Art of Loving*, Harper & Brother Publishers
- 1957 : The Limitation and Dangers of Psychology, in :
Religion and Culture
- アルブレヒト、シュスラー (Albrecht, Renate ;
Schusler, Werner) :
- 1993 : *Paul Tillich : Sein Leben*, Peter Lang
- フンク (Funk, Rainer) :
- 1983a : 佐野哲朗、佐野五郎訳『エーリッヒ・フロム』紀
伊國屋書店 1984
- ヒルトナー (Hiltner, Seward) :
- 1974 : Tillich the Person, *Theology Today* 30, no.4
- ジェイ (Jay, Martin) :
- 1973a : 荒川幾男訳『弁証法的想像力』みすず書房 1975
- 1986 : *Permanent Exiles*, Columbia University Press
- 1986a : 今村仁司、藤澤賢一郎、竹村喜一郎、笹田直人
訳『永遠の亡命者たち』新曜社 1989
- ナップ (Knapp, Gerhard P.) :
- 1989 : *The Art of Living - Erich Fromm's Life and
Works*, Verlag Peter Lang AG
- 1989a : 滝沢正樹、木下一哉訳『評伝エーリッヒ・フロム』
新評論 1994
- 大島末男 :
- 1997 : 『ティリッヒ』清水書院
- パウク (Pauck, Wilhelm and Marion) :
- 1976 : *Paul Tillich - His Life & Thought Vol.1:Life*,
Harper & Row, Publishers
- 1976a : 田丸徳善訳『パウル・ティリッヒ 1 生涯』ヨル
ダン社 1979
- 佐藤敏夫 :
- 1978 : ティリッヒとフランクフルト学派, 『ティリッヒ
著作集』月報第1号所収, 白水社
- シュスラー (Schusler, Werner) :
- 1997 : *Paul Tillich*, Verlag C.H. Beck
- ヴェーア (Wehr, Gerhard) :
- 1979 : *Paul Tillich*, Rowohlt Taschenbuch Verlag
- 1998 : *Paul Tillich. zur Einführung*, Junius Verlag
- 安田一郎 :
- 1980 : 『フロム』清水書院
- (いまい・なおき 西南学院大学文学部助教授)